

伊藤由孝作 「テレビ」

ナレーション ここは都内のあるアパートの一室です。何やら引っ越しのようです。

効果音 (屋下がり。子供の遊ぶ声)

伊藤由孝 よいしょっと。これで一応終わった。

母 由孝、本当に大丈夫かい？

由孝 大丈夫だよ。あと1年くらい独りでなんとか頑張るよ。それより母さん、もう時間だよ。

母 じゃあもう行くけど、由孝、体には気をつけるんだよ。風邪などひかないように。

由孝 はい。

母 夜更かしをしないように。

由孝 はい。

母 何かあったらすぐ電話するんだよ。

由孝 分かってるよ。母さんも心配性だね。もう子供じゃないんだから大丈夫だよ。じゃあね。

効果音 (ドアの閉まる音)

ナレーション 両親のもとを離れ、伊藤君は残りの高校生活を、アパートで独り暮らしをすることになりました。

由孝(モノローグ) 今日からこの部屋がおれの家だ。独りかあ…。さてと、残りを整理してしまおうか。

ナレーション 整理し終わった6畳の部屋には、ロッカーダンス、本棚、そして机、その横に小型テレビが置いてあります。

効果音 («パチっ」とテレビをつける音。バラエティー番組。由孝の反応声、笑い声)

由孝(モノローグ) あ、いっけねー、もう12時だ。寝なくちゃ。

ナレーション 伊藤君はいつも寝る前には聖書を読み、祈って床に着くのですが…。

由孝(モノローグ) あ～あ眠い。いいや、一日ぐらいしなくても。とにかく寝よう。明日遅刻してしまう。

ナレーション けれど、起こしてくれるお母さんもいなくなって、案の定、遅刻——。

由孝 あ、いけねえ。間に合わなかったかあ。生活部の先生が待ってら。

荒木先生 珍しいな、伊藤が遅刻するとは。それに比べて高橋！ 欄に書ききれなくなっていきたぞ。もう少し早く起きろ！

高橋秀哉 早く起きる努力はしているんですが、途中の踏切がラッシュでなかなか上がらなくて。

荒木先生 何を言ってんだ。早く起きればそんなことはない。

ナレーション しかし、その時は他人事のように聞いていた伊藤君も、1週間もたつと、高橋君のように遅刻の回数が多くなっていました。

荒木先生 伊藤！ 遅刻の常習犯になりたいのか！ 高橋のような「踏切が上がらなくて」なんて理由は通らんぞ。

由孝 はあー。なかなかテレビが終わらなくて。

荒木先生 何を言ってんだ。テレビはスイッチ一つで消えるんだ。3年生だろ。もっとケジメのある生活をしろ。以前生徒会長やっていたとは思えんぞ！

ナレーション 日がたつに連れて、彼の高校生活もだんだんと乱れてゆき、授業中も居眠りをするようになりました。そして、学校が終わると家に帰ってしまい、聖書研究会の部長でありながら、無断で休むようになりました。

場面は変わって、ここ聖書研究会の部室では、部長の伊藤君が休んでいるため、副部長の今村君が部をまとめていました。

- 渡谷利香 副部長。部長の伊藤君、2週間近くも休んでるけど、どうしたの？
- 今村和彦 あいつ、学校休んでいるわけじゃないんだけど、近ごろ少しヘンなんだよ。まあ、そのうちにとっと思っ、そっとしておいてるんだが…。とにかく、あいつのために祈ろう。
- 今村、渡谷(祈り) 愛する天のお父様、部長の伊藤君は、2週間近くも足を遠ざけています。もし彼がイエス様を第一のものとせず、聖書からも祈りからも遠ざかっているならば、彼をお許し下さい。
- ナレーション しかし伊藤君は、その祈りも知らず、帰宅するなり――。
- 効果音 (テレビの電源を入れる音)
- ナレーション 彼は独り暮らしの孤独を紛らわすためには、自分自身“いけない いけない”と思いつつも、いつしかそれなしではいられない“テレビ中毒”のようになっていました。
- 由孝(モノローグ) アパートに入ると、真っ暗な部屋が待っているだけだ。全くたまらんぜ。そんなどうしようもない気持ちをテレビに向けてしまった。そのため、聖書や祈りの時間もテレビに食われちゃう。でも、実際やめられないんだな。
- ナレーション 次の日も、伊藤君は聖書研究会を休み、そして2週間たっても出てきません。そのため、伊藤君に対しての不満はますます高まっていきました。
- 渡谷 副部長。部長の伊藤君、また休み。今日で3週間目よ。一体どういうことなの？ 説明してよ。
- 今村 いや、なんでもあいつのおやじが北海道に転勤してしまい、「高校があと1年だけだから」と言っ、アパートで独り暮らしをしているんだよ。
- 高橋 でも、それじゃ休む理由にはならないぜ。
- 渡谷 そうよそうよ。
- 福島 でも、伊藤君も変わったわね。生徒会長をしていた時の伊藤君と言ったら――。
- 効果音 (エコー。回想)
- 音楽 (ブリッジ)
- 由孝 文化祭まであと2週間。受付、広報、展示、装飾の各準備。それから実行委員会との打ち合わせ。今週にすべて完了させるぞ！
- ナレーション そうです。生徒会時代の伊藤君は、高橋君ほか、生徒会役員を一人で引っ張っていたのです。
- 高橋 そうだよな。あのころの伊藤と言ったら、おれが役員としてくじけそうになった時、おれを助けてくれたよ。
- 今村 それにあいつは、おれがバイクで事故起こして入院した時、毎日毎日見舞いに来てくれた。そしてあいつの祈りでおれの傷もよくなっていった。(間)よし、おれは今日あいつとこ行って、とことん話し合っしてみる。
- 上野明子 水臭いわね、今村君。この聖書研究会は少人数だけど、生徒会以来の仲間、一つの家族みたいなものじゃないの。その一家の大黒柱が倒れるのを見ていられるわけがないでしょ？ ここにいるみんなも行くわよ。
- 全員 (口々に)「もちろんだよ、今村。」「もちろんよ、今村君」etc.
- 今村 よし、じゃあ伊藤の住んでるアパートに7時に集合だ。
- ナレーション こんなことも知らず、当の伊藤君と言えば――。

効果音 (テレビの音声)
効果音 (ドアの開く音)
今村 伊藤、上がらせてもらうぜ。
伊藤 なんだよ、今村。なんだよ なんだよ！ 皆、失敬じゃないか。
今村 伊藤、テレビのスイッチを切れよ。
効果音 (スイッチを切る音)
渡谷 伊藤君、「なんだよ」はないでしょ。聖研の部長のくせに、3 週間も無断で休んで。
高橋 そうだぞ、伊藤。
今村 まあまあ、皆。伊藤、どうしたんだよ。訳を聞かせてくれ。
ナレーション 伊藤君は、皆の勢いに負けたのか、うつむいて黙りこくってしまいました。
今村 遅刻は多いし、授業中の居眠りは一体どうしたんだよ。何か理由があるんだろう？
高橋 生徒会時代の伊藤はどこへ行ったんだよ。あのころの伊藤は今とは違って燃えてたぜ。
福島 そうよ、伊藤君。
高橋 おれが思うのにはテレビじゃないのか？ 孤独を紛らわすために。それに伊藤は、酒やタバコはやらんし、マージャンも知らんしな。
伊藤 そうなんだ。
高橋 やっぱり。
今村 そうか、伊藤。だけど聖書や祈りは続けているんだろうな。
伊藤 全然…。
ナレーション その時、今村君は、一冊の聖書を伊藤君の前に出しました。
伊藤 この聖書は…。
音楽 (回想のブリッジ)
伊藤 あ、これ。今村君の気が静まったら、彼に渡してください。
今村の姉 まあ、すみません。なんですか？
伊藤 僕、クリスチャンなんです。それで、これ聖書なんです。
ナレーション そうです。今村君が差し出した聖書は、以前彼がバイク大けがをした時、彼の暗い心に光を当てた聖書なのです。
今村 クリスチャンがイエス・キリストを第一のものとせず、聖書や祈りから遠ざかったらどうすんだよ。伊藤、錨を降ろせよ。そして雄々しく燃えていた以前の伊藤に戻れよ。
ナレーション なおも黙っている伊藤君に、今村君は、エペソ人への手紙5章8節～9節を見せました。
今村 伊藤。その聖句を読んでみろよ。
伊藤 「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。——光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。——」
…皆、ごめん！ 部長でありながら、3 週間も休んで、なんか無性につまらなくなってしまっ
てなあ。おれ、自分に甘たれていたんだよ。テレビという誘惑にどっぷりつかって、聖書や
お祈りから遠ざかり、そして皆の暖かい友情にも背を向けていたんだな。
今村、今の聖句、ありがとう。前は素通りしていた箇所も、今のおれの心には、光を当てら
れたようにジーンときたよ。皆、おれ、もう一度やってみるよ。

<完>